日本天文学会早川幸男基金渡航報告書

2007年9月10日採択

申請者氏名	**内山 泰伸 (会員番号 3866)**
連絡先住所	〒229-8510 相模原市由野台 3-1-1 宇宙科学研究本部
所属機関	宇宙航空研究開発機構 宇宙科学研究本部
職あるいは学年	PD
任期 (再任昇格条件)	1年 (再任3回限り)
渡航目的	研究集会での招待発表
講演・観測・研究題目	Resolved jets in quasars and radio galaxies
渡航先 (期間)	アメリカ合衆国 (2007年10月22日〜10月26日)

早川幸男基金による渡航費用の援助を受け、国際会議「Eight Years of Science with Chandra」において招待講演を行った。チャンドラX線衛星に関連するサイエンスを網羅的に議論する総合的な会議であり、隔年で開催されてきている。私は、「Resolved jets in quasars and radio galaxies」 と題した講演で、チャンドラ衛星による高空間分解能観測が切り開き、大きく花開いた活動銀河核ジェットに関する多波長観測研究についてのレビューを行った。

今回の Chandra Symposium の会場は、アラバマ州ハンツビルのマリオット・ホテル。ハンツビルはアメリカ陸軍のミサイル開発の中心地レッドストーン兵器廠 (Redstone Arsenal) とそれがホストする NASA マーシャル宇宙飛行センターと共に発展した都市であり、「The Rocket City」とも呼ばれる。フォン・ブラウンを中心にこの地で開発され、アポロ計画で活躍したサターンVロケットの実物大モデルがマリオット・ホテル隣のロケットセンターに展示されており、その化け物ぶりが印象的であった。

シンポジウム会場に隣接したロケットセンターにて撮影。サターンVは奥の特別施設内に置かれており、帰りのタクシー内から拝むことができた。

今回の渡航では現地の NASA NSSTC (National Space Science and Technology Center) に所属する Nishikawa さんにお世話になった。Nishikawa さんは相対論的ジェットや衝撃

波粒子加速のシミュレーションをやっておられる方で、私と共通する科学的興味も多く、今回の渡航をひとつの契機として新たな研究の輪としたい。実際、2008 年のチャンドラ理論プロポーザルでは共同提案者に加えて頂いた。

シンポジウム会場であるマリオット・ホテル内ロビーで撮影。一番右が筆者。(余談であるが、ちょうど MLB のリーグチャンピオンシップの期間で、レッドソックスの岡島投手の快投をこのロビーで見ることができた。)

日本からの参加者は、私のほかには理研の磯部さんと埼玉大の矢治さんのお二人であった。日本人という意味では他に NASA GSFC の浜口さんら 3, 4 人の参加があった。Nishikawa さんを除けば、みな 35 才以下の若手研究者であろう。いろいろな国際会議に出て思うのは、欧米の研究者は 30–70 才まで幅広い年齢層におおむね均等に分布しているのに対し、国際会議における日本の研究者は若手に分布がやや偏っているのではないか、ということである。団塊ジュニアということで 34 才に出生数のピークがあることと大学院重点化という日本の事情があるにせよ、これでは日本の宇宙科学の厚みをアピールすることはむずかしいのではないか。特に諸々の「審査」を通して日本の宇宙科学の決定権をもつ世代の方々には積極的に世界の動向を体感していただきたいものである。(おっと話が渡航報告から逸れてしまったようだ。)

最後に、今回の渡航費用の援助を頂いた早川幸男基金、そしてそれを支える関係者の方々に、深く感謝いたします。おかげさまで有意義な海外渡航になりました。